

# 第13次復興支援ボランティア

派遣期間	2012年11月 9日(金)～11日(日)			
派遣場所	宮城県仙台市若林区	派遣人数	33名	長電全体 ※貸切

## 《参加者氏名》

班	氏名	所属組織名	班	氏名	所属組織名
1	内山 拓己	自治労飯田市職員労組	2	橋爪 亨	JAM甲信タカノ労組
	佐藤 博之			寺澤 博史	
	小平 文子			川手 正博	基幹労連IHI回転機械労組
	小平 恵美			有賀 栄治	
	北原 真由			※家族	増田 充康
	大澤 創	自治労喬木村職員労組		桂川宗一郎	電力総連中部電力労組
	木下 洋二	全水道飯田市水道労組		羽田 一城	電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部
	鈴木健一郎	JAM甲信多摩川精機		北尾 裕	
	長沼 俊朗	労組		松澤 斉	
	野牧 司	JAM甲信平和時計労組		吉沢 昌男	
清水 友博	電機連合弘明飯田労組	山田 理			
三村 寿宏	J P 労組長野連絡協議	上島枝三子	電機連合ルビコン労組		
2	菅沼 克浩	会	3	宮澤 敏彦	電機連合長野日本電気
	藤沢興一郎	情報労連NTT労組飯		酒井久美子	労組
	渡辺 明	田分会		小山 桂子	自治労県職労諏訪支部
	伊藤 佳臣	JAMNTN労組長野		成沢 勇次	連合長野事務局
	藤林 正則	支部			

## 《3日間のスケジュール》

11月 9日(金) 曇りのち晴れ

- 3:20 キラヤ伊賀良店出発                      4:15 ウェストスポーツパーク管理センター出発
- 4:55 みどり湖PA出発                          6:15 佐久乃おぎのや出発
- 12:30 リルーツのボランティアハウス到着
- 13:30 若林区三本塚地区の農地の土起こしとガレキ拾い
- 15:50 リルーツのボランティアハウス出発
- 16:30 ホテル到着                                  18:00 団結会

11月10日(土) 曇りのち雨

- 8:00 ホテル出発                                  8:30 ボランティアハウス到着
- 9:30 若林区二木地区の農地の土起こしとガレキ拾い
- 15:30 リルーツのボランティアハウス出発
- 16:15 セケ浜町VCとセケ浜町内の視察              18:05 ホテル到着

11月11日(日) 曇り

- 8:00 ホテル出発                                  8:30 ボランティアハウス到着
- 9:30 若林区藤塚地区の農地の枯れ草抜きと片付け
- 12:00 現地で黙禱、若林区荒浜地区の慰霊碑にて黙禱
- 19:15 佐久乃おぎのや到着                                  20:45 みどり湖PA到着
- 21:25 ウェストスポーツパーク管理センター到着              22:20 キラヤ伊賀良店到着



### 《参加者の想い・感想》

#### **飯田地協** [自治労飯田市職員労組・内山 拓己]

今回、復興支援ボランティアに参加させていただき、身をもって、復興支援がいかに困難で道半ばであるかを感じました。

私が参加した動機は、震災から1年半以上経過し、ニュースや新聞などでも取り扱われることが少なくなっている中、「被災地の現状について、少しでも自分の目で確かめたい」という思いでした。もちろん「被災者の役に立ちたい」という思いもありましたが、恥ずかしながら、前者のような軟な考えが強かったと思います。

実際に作業をしてみて、正確に言うと長野県に戻ってきて、まず気づいたことは「自分自身が思っていた以上に疲れていた」ということでした。2泊3日の短い期間にも関わらず、肉体的にも精神的にも少し変化しているようでした。作業中は夢中で気づきませんでしたが、慣れない環境でボランティア活動をする事、被災地の現状を目の当たりにすること、自分が感じていた以上に大変なことだったのです。

テレビやニュースをみて復旧・復興の難しさは理解していました。ガレキ処理の問題や施設の復旧や仮設住宅の暮らしが大変だということも耳にしていました。ただ、まさか田畑を少し復旧させる手伝いをしただけでもこんなに大変なのかと。考えてもいませんでした。

同時に、一人ひとりが少しずつでも、長い期間にわたり協力していくことが重要であると強く感じました。被災者や一部の人達だけでは復旧はままならない。それが長野に帰ってきて感じた、今回のボランティア活動の感想です。

同じ島の上に住む者同士、今後も復興支援活動には可能な限り協力していこうと思います。最後に、このような機会を企画してくださった方々、受け入れてくれた方々、班のみなさん、そして快く参加を許してくれた職場のみなさん、本当にありがとうございました。

#### **飯田地協** [自治労飯田市職員労組・佐藤 博之]

東日本大震災が発生してから早くも二年弱が経とうとしている。

妻は震災直後から日本赤十字の災害派遣看護師として石巻に入り活動していたし、長男は高校のボランティア活動で3度牡鹿半島に入って活動していた。何かしたいとずっと思っていたが何もできていなかった私。今回南信発のツアーの募集があり、即応募した。

今回は仙台市若林区での活動を行ったが、実際に現場を見てみると、まだまだ手が入っていないと

ということがよくわかった。

1日目、2日目は、畑のガレキを掘る作業を行った。スコップでひとつひとつ掘り起こすと、土の中から普通考えられないような、瓦、金属、電線、海のものと思われるつるつるした石、海沿いの松林から津波で流されてきたと思われる「マツボックリ」。様々なものが土の中から次々と出てくる様には本当に驚かされた。これでは、到底農業などできるものではないと感じた。

ボランティアの合間には、荒浜地区や七ヶ浜町の視察を行った。荒れ果てて何もない大地、基礎部分だけが残った家、1階部分が崩壊しそのままになっている家や学校。津波のパワーを思い知らされた。

1日目の作業では、畑の持ち主である方からは、たった2時間の作業にも関わらず、心のこもったむきりんごと缶コーヒーをいただいた。申し訳なく思いつつありがたく頂戴した。お聞きすると来週から家を新築する工事に着工するという。なんとも前向きで希望を捨てずがんばっておられる姿を拝見し、感動さえ覚えた。

2日目の作業では、近くの1階部分が壊された民家があった。休憩をしているとそこの住民と思われる方がこられた。お話をうかがうと現在は仮設住宅で生活をしているという。現在は仮設住宅から元の家まで自転車で通っては、少しずつ片付けや農作業をされているという。津波により家や庭は瞬く間に破壊されたそうである。しかしまたこの地に家を建てるという話をうかがった。盛土をして津波に強い家を建てようと、具体的に計画をされていた。皆さんとても前向きに生きている姿を見るとなんだか私たちまで元気をもらえたような気がした。

震災から2年弱、次第に次第に震災や原発事故が風化されつつある。しかし、実際の現場を見てみると、まだまだやることはたくさん残っており、長い支援の必要性を感じた。私もまた機会があればぜひボランティアに参加し、末永い支援（お手伝い）をしていきたいと思った。

#### **飯田地協** [自治労飯田市職員労組・小平 文子]

自分家の畑も掘り起こした事のない農家の嫁が、「家の事もせんで人さまのボランティアもあったもんじゃない」と言われそうだと思ったが、スコップで土を掘り起こして、石や瓦、木やガラス、ビニールや茶碗の破片を分別してきた。

10時間かけて着いた海は、信州人があこがれる海のままなのに、そこにあった街はコンクリートの基礎だけ、門や玄関のタイルだけ、ステンドシールが貼られた窓と破れたカーテンだけになっていた。

「波が持って行ったんだから、全部返してほしい」なんてセンチになったが、ボランティアリーダーの学生さんは力強く前を見て行動していた。

総理さん、今の若いもんはちゃんとやってますよ。仙台にはやる事が沢山ある。皆がありがとうって言ってくれるし、自分を必要としてくれる。

帰って来ていつもの茶飯事に振り回されていますが、生涯忘れられない経験ができました。又行きます。

#### **飯田地協** [小平 恵美（娘）]

3. 11、TVで津波にのみこまれている様子を見てた。その後職場から救援に行った人々の報告会でも現場の様子を見聞きした。またこの1年半、当時からの変化の様子は幾度となくTVで目にしてた。しかし、どれも私にはなかなか同じ日本で起こっているとの実感がわかなかった。

けど、職業柄か…私も何か力になりたいとの思いはあり、何ができるか、どうしたらいいかわからずに何もせずに月日が過ぎていた。そんな中母からこの話を聞き、今回初めて現地に足を踏み入れた。

一見、だだっ広い、平地が広がりどかな風景にも見えたが土を掘り起こしていると、どこかで見たことのある玩具の破片が出てきたり、家の壁についた実際の津波の高さの波後を目の当たりにしたり…、朝礼で「ラジオ持ってますので…」との話を聞いていると、徐々にものすごいことが起きたんだと実感し、また恐怖心を抱いた。実際の活動は細かな作業であり、思っていたより達成感は少なかったけれど、リーダーさんやボランティア経験者の方の話を聞き、復興は並大抵な事でない、小さな積み重ねが重要、また実際に行えなくとも被災地の事を忘れないこともボランティアである、と知った。なかなか遠方で実際に行くことは簡単にはいかないが、今回の経験を大切に、ぜひまた機会を見つけ行きたいと思う。

まともでないが本当に3日間は貴重な体験だった、いい機会を経験できたことを3日間お世話になった方々に感謝します。ありがとうございました。

### **飯田地協** [自治労飯田市職員労組・北原 真由]

震災以降、行かなければとずっと思いながらも、なかなか現地には行けずに時間が経ってしまいました。今回機会を与えていただき、初めてボランティアに参加することができました。

震災から1年半以上が経ち初めて見た現地は、すでに大きながれきが片づけられており、始めは巨大な空き地といった印象を受けました。一方で、海岸地域に近づくほど壊れた建物やがれきの集積所が残っていたりして、街を飲み込んだ津波のすさまじさが想像され言葉を失ってしまいました。

実際のボランティア作業では、農地の細かいがれきを取り除く作業などを行いましたが、この短い期間では1軒分の畑も終わることができませんでした。私たちが終えられなかった分はまた別の団体が引き継いで作業を続けていくそうですが、元通りに作物が育てられるようになるまで、普通の生活ができるようになるまでには途方もない時間と人手が必要だということを実感させられました。

この三日間のボランティアを通じ、被害の大きさや津波の恐ろしさなど、報道では伝わりきらない現地の空気を身をもって感じることができました。また、今回私たちのボランティアの受け入れを行ってくださった震災復興・地域支援サークル **ReRoots** の大学生や、七ヶ浜ボランティアセンターのスタッフの方々、他県からボランティアにやってきた大学生など、復興へ向けて努力している方々の姿がとても印象に残っています。

道のりは長いかもしれませんが、こうした人たちとともに、私も自分にできることをこれからも続けていきたいと改めて思った三日間でした。

### **飯田地協** [自治労喬木村職員労組・大澤 創]

今回ボランティアに初めて参加させていただいて一番感じたことは、「復興にはまだまだ長い時間と人手が必要」ということでした。

震災直後の瓦礫が散乱した様子が強烈な印象として残っているためか、被災地へ到着した際には、瓦礫が撤去され整地された光景は復旧作業が一段落ついたように見えました。

しかし、ボランティア作業として農地を掘り返すと、出てくるものはおびただしいほどの瓦礫でした。被災地からこれら全ての瓦礫を除去し、震災前と同様に利用するためには一体どれほどの時間と人手が必要なのか想像すると気が遠くなる思いでした。

私を含めて被災地の外にいる人たちにとっては、震災は過去の出来事として記憶から徐々に薄れ始



めているのではないのでしょうか。しかし、被災地の方々は、まだ仮設住宅に住まわれたり、昔のように農業や漁業ができなかったりと今も被災の最中にいるのだと感じました。

私たちにできることは、被災地を復興させたい、被災地のためになにかしたい、そう思う気持ちを持ち続けることだと思います。ひとりひとりの力は本当に限られていて、少しずつしか前に進まないとは思いますが、いつか東北の方々に震災前の日常が戻ってくるよう私自身これからも復興のお手伝いをしていきたいと思っています。

#### **飯田地協** [全水道飯田市水道職員労組・木下 洋二]

11月9日出発の復興支援ボランティアに参加させていただき、大変にお世話様になりました。

作業現場でお行き会いた被災された方々の、まっすぐに前を向いて復興して行こうとするお気持ちに触れ、強く心を打たれました。

私が見てきたところは全体に比べればほんの一部ですが、バスで走っても延々と続く被災地の広さ、被害の甚大さを改めて感じさせられました。

地元にながらにして自分にできることのひとつとして、今は、このことを一人でも多くの方に伝える活動を始めました。少しずつでも、ずっと継続していきたいと思っています。

私にとっては、初めてお会いする皆さんと、初めてのボランティアに参加できて本当に良かったと思います。ありがとうございました。

#### **飯田地協** [JAM甲信多摩川精機労組・鈴木 健一郎]

11/9～11の3日間、復興支援ボランティアに参加したことで被災地の現在をメディアを通じてではなく自分の目で確認することができた。

活動場所は平坦な畑の広がる地域であり、普通であれば冬野菜の緑が見られる季節である。しかしながら広がっていたのは見渡す限りの土色だった。活動の中で畑を掘り起こせば出てくるガラス片などの瓦礫。まだまだ復興への道は遠く政治の対応の遅さに憤りすら感じた。

しかしその一方でボランティアという支援の輪がある。一人ひとりの力は小さいが多くの人が参加することで最後には大きな結果につながると思う。活動場所は3日間すべて異なる場所であったので完全に作業が完了した畑は一つもない。しかし別の団体がバトン引き継ぎ必ず緑あふれる畑がよみがえると信じた。

ボランティアに参加したい方は今後も行われる連合長野の復興支援ボランティアに是非参加頂きたい。一人でも多くの方が参加して支援の輪が一層広がることに期待する。これまで間接的支援でしか関わってこなかった私にとって多くを知り・感じる貴重な体験をさせて頂いた3日間であった。

#### **飯田地協** [JAM甲信多摩川精機労組・長沼 俊朗]

土をスコップで掘り返し、埋まっている瓦礫を取除くという見た目よりも地味な作業であったが、思ったよりも作業が進まなく三日間の活動では畑が使えるようにはならなかった。

ひとつの畑が使えるようになるには多くのボランティアの力が必要であり、農業の復興にはまだまだ



だ時間が必要であることがわかった。また、都市部以外ではなかなか復興が進んでいないことも感じた。

震災より1年8ヶ月が過ぎ、報道される機会も減り、東北以外の地域では関心が低くなってきていると思われる。国は直接手を下さないのであれば、もっとボランティア活動の後押しをすべきではないかと思う。義援金の使い方をもっと考えて欲しいものである。

#### **飯田地協** [JAM甲信平和時計労組・野牧 司]

今回、初めて被災地のボランティアに参加させていただきました。

1日目と2日目は畑のがれき撤去を行いました。始める前のイメージは畑の表面にたくさんのがれきが落ちていてそれを拾って綺麗にするものだと思っていました。しかし実際には、スコップで土を掘り起こしてその中からがれきを選別して撤去する作業でした。

最終日には畑の草取りを行いました。一面草に覆われていて大変だと思いましたが、皆さんの頑張りで半日で大まかな草取りが終わってしまいました。

3日間ボランティア活動をして少しでも被災地への貢献ができてよかったです。

参加者の中に、「私たちは微力です。しかし無力ではありません。」と言っていた方がいたので被災地復興のために今後もできることを行なっていきたいです。

#### **飯田地協** [JP労組長野連絡協議会・三村 寿宏]

今回、飯田出発のボランティアに参加させていただきました。

長野県でも一番南に位置する飯田市からは東日本大震災の被災地に個人として赴くにはこのような機会がなければ、なかなか出来ないため冒頭この機会を与えていただいた、連合長野及び長電観光さんに本当に感謝いたします。

私は昨年8月連合本部のボランティアで岩手県の中でも被害が大きかった陸前高田と大船渡に行って以来のボランティア参加となりましたが、作業をさせていただいた仙台市若林区はやはり3月11日のまま時間が止まっていて、まだまだやらなければならない事が多くあると感じました。

数多くの家がなくなり基礎だけ残っている街を見て、あの日までそこには私たちの暮らす街と同じようにコミュニティーがあり人々が笑顔で暮らしていたと思うと本当に心が痛くなりました。

この現実には報道や人の話では分からない。一人でも多くの方が現地に赴き自分の目でその現実を見て、自分自身がいま何をすべきか考えなければならぬと思いますし、自分自身も引き続き自分が出来る支援を続けていきたいとさらに思いを強くすることが出来ました。

所々で綺麗に整備された畑に収穫を待ち整然と並ぶ野菜を見たとき、復興の足音は着実に聞こえている、「がんばっぺし東北！」と心の中で叫んでいました。

ぜひ今後も機会を作りボランティアに参加していきます、今回参加された32名の皆様ほんとうにありがとうございました。



## 飯田地協 [ J P 労組下伊那支部・菅沼 克浩 ]

ずっと、震災復興ボランティアに参加したいと思ってはいたものの、なかなか思い切れずにいたところ、今回は飯田からの出発と聞き、すぐに申込みをさせていただき、念願が叶い震災復興ボランティアに参加することができました。

今回は仙台市郊外の若林地区での復興支援作業でした。仙台市内は活気に溢れ一見すると震災など無かったように思われますが、一步郊外に行くと荒廃した広大な水田や畑、山積みにされた自動車やオートバイ、いつ終わるか想像もつかないほどの大きさの瓦礫の山。まだまだ復興にはほど遠いという印象でした。

最終日に荒浜地区の住宅地であった場所へ行くと、見渡す限り遮る物は何もなく、視界に入ってくるのは中心地辺りに寄り添って並ぶお石塔の数々でした。よく見ると、全てが真新しいものばかりで、まさに自分が立っているこの目の前で、津波により多くの人の命が奪われたのだと実感しました。また、下に目を向けると、家の基礎部分だけが残されていて、そこにあったであろう暮らしの姿を思い、胸が詰まる思いでした。



家に帰り高校生の娘に撮影してきた写真を見せながら様子を話すと、普段は話しかけてもろくに返事もしないのに、食い入るように写真を見ながら私の話を真剣に聞いてくれました。

今回現地に行き、復興にはまだまだ大勢の力が必要だと痛感しました。機会があればもう一度参加したいと思いますし、組合員にも積極的に参加を呼び掛けて一人でも多くの組合員の参加を促したいと思います。

## 飯田地協 [ 情報労連 N T T 労組飯田分会・藤沢 興一郎 ]

今まで募金や“復興カキオーナー”と金銭支援は行ってきたが「現地で何か出来ることは無いか」「でも、どうすればいいのか分からない」と思っていたところに、組合から『飯田発』の今回の話を聞き、有難く参加させて頂いた。ツアー企画運営の長電観光社、バスの運転手のお二方、成沢氏と連合長野、送り出してくれた情報労連、我々を三日間受け入れてくれた「リルーツ」、御多忙の中、我々のためにお時間を割いて頂いた七ヶ浜の方々に御礼申し上げます。

初日・二日目の作業は農地の瓦礫撤去であった。スコップで土を掘り返し、中からガラス片、金属片、プラスチックや布など出てくるものを拾っていった。二日目は秋田から来た学生さん達と一緒したのであるが、彼らのその青年の力強さを、我々中年はまざまざと思い知った（作業して進む距離にエライ差が・・・）。二日目の作業後の夕刻、七ヶ浜を視察（長電のボランティアツアーで先に来られた方々が七ヶ浜で作業をされていたとの由）したが、バスの中から新しい N T T 交換局が見えた。

家屋だけでなく、小型とはいえビルすら飲み込み押し流す津波の恐ろしさを見た。車中、七ヶ浜の方々から、被災前、被災時、被災後のお話をお伺いした。延べ六万人ものボランティアにより、瓦礫を撤去したという。七ヶ浜の皆さんが映っている『笑顔カレンダー』を購入させて頂いた。我が労組事務室の壁に掛けさせて頂く。

最終日の午前中に、農地三反の除草作業を東京から来た学生さん達と行った。最終日のせいか、我等中年のパワーがドッと出、学生さん達を凌駕する素早さで背の高い草は掻き集められた。

三日間で我々と学生さん達で撤去した瓦礫は目方で三アール程度、除草は三反（しかも農地復旧にはまだ二百人稼働が必要）。まだまだ、復興前の復旧に、人海戦術が必要であることを、身をもって知った。“無能で怠惰”としか思えぬ民主党政権への怒りも沸くが、私に出来る事は続けたいという思いも沸いた。社会人として、出来る事を継続して行きたい。

#### **飯田地協** [情報労連NTT労組飯田分会・渡辺 明]

腰や肩の痛みを感じながら仙台、被災地での三日間のボランティア活動を振り返りあらためて復興への道のりは大変だと痛感しました。

震災直後と比較すれば確かに復旧は確実に進んではいますが、二回目の冬を向かえる今日多くの人々が仮設住宅等に、仮住まいしていることを考えれば胸が痛みます。

でも若い大学生が進んでボランティア活動をしている姿を見て大変感動しました。学生との会話のなかで「大変ですねたまには、遊びに行きたくはないですか」と聞いたところ、今この時でなければできない事がありきっと何か得るものが有ると答えてくれました。震災によって多くの物が失れたが心温まる話も沢山聞きました。

また七ヶ浜でボランティア活動をしている方が、時間とともに私達の記憶から少しずつ災害が忘れようとしていることが残念でなりません、被災地を忘れないでほしいと伝えてました。

初めて参加したボランティア活動でしたが固いイメージなどなくなかには夜の交流疲れの方もいたようです。

最後に今回のボランティア運営に携わった皆様、参加された皆様大変ご苦労さまでした。

#### **上伊那地協** [JAM甲信NTN労組長野支部・伊藤 佳臣]

3. 1 1、あの東日本大震災を会社の食堂で遭遇し、世界最大級の巨大地震と大津波がもたらした震災の状況、そして暮らしを根こそぎにした震災を懸命に伝えるTV報道を見て、「何か力になりたい」と思いながら1年7ヵ月が過ぎてしまいました。何度となくボランティア活動のチャンスは有りましたが、都合がつかずようやくボランティア活動への機会を作っていただけた、連合長野、上伊那・飯田地協、長野電鉄に感謝いたします。

被災地に入り、1年7ヵ月も経過すると、震災当初からの悲惨な光景は何えることはないものの、まだまだあちらこちらに、がれきの山が存在していること、がれきの撤去は終了したものの、集落が存在していた地域の家の基礎だけが残っている光景は、なんて無残だろうと思うばかりでした。

今回のボランティア活動は、「ReRoots」の震災復興・地域支援ボランティアハウスを拠点とする「復旧から復興」更には「地域おこし」に向けた活動をしているサークルへの支援協力となりました。

3日間の受け入れ対応いただいた「ReRoots」のリーダーについては、震災当時まだ高校生であった方々でした。若いメンバーが多くのボランティア参加者をまとめ、地域のために取り組む姿勢、活動を進めていることに感動しながら活動に取り組みました。活動は農地の地中内に埋もれたまま残っ



ているがれきの撤去と農地の雑草の撤去でした。地道な作業で2日目・3日目と学生ボランティアと共に取組みを進めましたが、小さな農地1つを完了することが出来なかったことは残念でした。

車中で参加者の一人よりこんな言葉を聞きました。「我々が取り組む活動は、微力だけど無力ではない」、3日間の活動を通して、復興までの道のりは果てしなく遠く、さまざまな困難を極め、まだまだ長期にわたることを感じ「微力」では有りましたが、東北の力になれたこと、良い経験になりました。

今回のボランティア活動で、見て聞いたことを会社の同僚・友人・家族に伝え、3日間一緒に活動した参加者と共に、復興までの闘いの支援活動に今後も繋げて行きたいと思います。ありがとうございました。

#### **上伊那地協** [JAM甲信NTN労組長野支部・藤林 正則]

今回の東日本大震災の復興ボランティアに参加して、改めて被害の甚大さを痛感しました。未だに1階部分が津波により無くなってしまった人家が立ち、スクラップと化した車や農機具、整地はされているがまだまだ使うことが出来ない農地など。現地の方は、直後のことを思うと瓦礫の処理等見違えるほどだといっていました。復興にはまだ想像も出来ないくらいの時間と労力が必要だと強く感じました。

今回、畑の瓦礫を撤去するお手伝いさせて頂きましたが、今回参加された皆さんと作業して、一步一步進んでいくのは感じましたが、まだ広大な農地のほんの一角に過ぎないと実感し、いつ元の青々とした野菜が実る農地になるのか想像がつきませんでした。

三日間という短い期間でしたが、今回の復興場ボランティアに参加する機会に恵まれたことに感謝して、今後もこの様な協力が出来れば幸いです。

#### **上伊那地協** [JAM甲信タカノ労組・橋爪 亨]

連合長野復興支援ボランティアに参加させていただきました。報道をはじめ、先発の支援ボランティア報告、また、6月に宮城県で行われた、連合長野執行委員会の東北開催の報告をお聞きするなかでは、私も、どこかのタイミングで参加したいと思っていましたが、なかなか、予定を取れずにいたわけです。

今回は、飯田出発で飯田地協、上伊那地協を中心に募集企画していただき、とにかくここで腰を上げて行かない事には、また先延ばしになってしまうと考え、労組内の同意も得る中で参加をさせていただいた次第です。

昨年の東日本大震災時、3月11日、ちょうど私は会社の業務出張で、中央道のとあるサービスエリアに到着する寸前でしたが、走行中になんともなく揺れる、と感じつつ、サービスエリアに車をとめてみると、相当の揺れを感じて、周囲の方々も驚いていた光景をいまでも思い出しますし、通行止めなどを迂回しながら帰社したあとに報道をみるなかで、その地震の大きさと被害を、目の当りにして動揺したのを今でも忘れる事ができません。

今回のボランティア作業の内容は、畑の瓦礫処理と、草取りといった内容でした。若林区は大変広い農村地帯で驚いたのですが、バスで移動する際には、こんな広いところのどこで作業するのかといった感じでありました。実際に、1日目は農家さんの畑の瓦礫処理を2時間かけて行ったわけですが、それほど広くない一区画の畑であるなどと思いつつ、30人工で作業をしてみると、結局、1/3程度までしか進まず、翌日は別のボランティア団体さんが作業をするという事で、我々の力の及ばなさ加

減を実感したわけです。しかし、そんな事であったとしても、作業終了後には、持ち主の旦那さん、奥さんから、ご苦労さまです、いつもいつもお世話になりありがとうございます、といった感謝のお言葉をいただくと、ああ、こんな小さな事でも、期待して待っていてもらえるのだなあと思い、その後の作業にも地道に力が入ったのでありました。

若林区の作業は、3日間、ReRootsという、地元のボランティア団体様にお世話になりました。作業のリーダー役の方は、今回は全員、地元の大学生さんで、講義を受けている傍ら、休日を中心に、ボランティアをしているという事で、ほとんど新入生に近い方々ばかりでしたが、テキパキと役目をこなし、考え方もしっかりしている様子で、今の若者は、などと言われる昨今ですが、いざとなればやるときはやるなあ、頼もしさを感じるとともに、今後の復興の一助を、責任感を持ったこういう方々が担っている事を知る事ができました。

若林区は、構築物などの大きな瓦礫の撤去はおおむね終わっている様子でした。しかし、各所で田畑の徐塩作業や、今回のボランティアで作業したような、土の中に埋もれた小さな瓦礫の除去等の作業が行われています。ごく一部には、青々とした野菜畑も垣間見え、心が和む風景もあったわけですが、全体としては殺伐とした感が多く、宿泊先の仙台市街地とは大きな違いです。

連合長野の東北復興支援ボランティア活動は、今回の若林区に限らず、今後も続く予定であります。一度に何かすごい事をしに行くという事ではなく、また、そういう事ができるという事でもなく、そこには期待して待っていてくれる方々がおられるという現実のなかで、地道な活動に長いスパンで協力して行くのが必要であると、実感した今回の活動でした。今後の中で、参加を検討されている皆様がいれば、是非一度、肌で感じていただければと思う次第です。

最後になりますが、今回私は“隊長”という役回りでありましたが、それらしき事をほとんどしておりません。初日に、参加者の皆様の今回の支援ボランティア活動に対する抱負をお聞きし、また前向きな姿勢をお見せ頂きながら、私も頑張ろうと、せっせと一参加者として作業に従事に専念できました事、また、全員大事もなく無事活動終了できました事は、これはなによりでありました。各位さま職場にもどられましても、ご健勝にお過ごしくださいませ。

#### **上伊那地協** [JAM甲信タカノ労組・寺澤 博史]

今回、復興支援ボランティアに参加して感じたことは、現地に入ると各種報道では伝わらない部分を目の当たりにし、復興するまでには数十年先になってしまうのではないかと感じた。現地の方達だけで復興することは到底無理だと思うので、今後も継続的に支援を続ける必要がある。

セヶ浜町の視察時に被災者の方から、震災当時の状況と現況を明るく元気に説明をして頂いた。その姿から逆にこちらが勇気づけられ、元気の源は何かと考えた時、前を向いて進むしかないといった覚悟と支援にくるボランティアの存在ではないかと思った。

何か少しでも役に立ちたいと思う方は、一歩踏み出し、現地に足を運んでほしいと思う。

#### **上伊那地協** [基幹労連IHIEアロマニューファクチャリング労組・川手 正博]

東日本大震災が発生し、テレビや新聞、報道等で、被害の状況が刻々と伝えられ、私はどんな支援が出来るのか？考えている内に1年8ヵ月という時間が過ぎてしまった。

もっと早く現地へ行くべきでしたが、今回良い機会を頂き参加させて頂きました。

今回伺ったのは、仙台市若林区、初めて見る被災地の現状、言葉になりませんでした。

一見大きなガレキは撤去され綺麗に見えるのですが、足元には、小さなガレキの破片が無数に散ら

ばっていました。撤去された大きなガレキは、あちこちに山となってまとめてありましたが処理は行われていない様でした。

3日間、ガレキの撤去作業をみんなで行いました。畑の土の中から、お茶碗のかけらや、子供用スプーンなど日常品が沢山出てきました。持ち主の方は大丈夫だったのかな？と色々考えながら作業を行いました。

2日目に七ヶ浜町へ行きました。自然豊かな観光地は、壊滅状態でした。

この地のボランティアセンターで働いている方は、被災者であるのに、気丈に振る舞って居られて私は逆に元気を貰った気がします。

若林区のボランティアセンターのスタッフは地元の大学生が主で運営されているようで、対応してくれた若者は皆、しっかりしており見習う所が多々ありました。



3日目、荒浜地区へ伺いました。海岸でみんなが黙祷が出来ました。現地でお悔みが出来たことは私の中でとても意味のある事でした。

近くには学校がありましたが、今はガレキの置き場になっていました。津波を経験された小さな子供達は、私達が想像もできない地獄を小さな身体で受け耐えて来たのかと思うと心が痛みます。

今回参加して思うことは、やはり現地にきて良かったです。現地・現物・現状をこの目で見て、聞いて事の重大さを体感で感じ取れた事が良かったです。この感じた真実を色々な人へ伝える事が出来ます。テレビや新聞では感じ取れない感覚が現地にはありました。被害に遭った畑の広さ、土の重さ、ガレキの種類。3日間でしたが、被災地の現状を少し理解できた気がします。

今回、同じ志のあるメンバーと作業を共に出来たこと大変有難く、貴重な時間を過ごす事が出来ました。「一人一人の力は微力だが無力ではない！」みんなで確認できたと思います。

近いうちに再び被災地へ行きたいと思います。私は絶対に東北を忘れないし、風化させない事を誓います。皆様、大変お疲れ様でした。事務局の皆様、大変ありがとうございました。



▲ 左から有賀・川手さん

#### 微力だけれど無力ではない

**上伊那地協** [基幹労連 I H I エアロマニュファクチャリング労組・有賀 栄治]

今回初めて復興支援ボランティアに参加させていただき被災地の現状を見て大きながれきは、撤去されていてきれいに見えたのですが、細かいがれきは、まだまだたくさんあると実感しました。畑の

中のがれき撤去にはたくさんのボランティアの手が必要であると実感しました。またがれきというけどそこに生活があったんだという言葉聞き、胸が詰まりました。一緒に参加した仲間とまたこようと誓いました。

また被災地の皆さんが明るく元気で、こちらが逆に元気をもらったような気がしました。

一人でも多くの方がボランティアに行くよう勧めていきたいと思います。



#### **木曾地協** [基幹労連 I H I ターボ労組・増田 充康]

二回目の参加ですが、いつも被災地の方々の前向きな姿勢や笑顔で逆にこちらが元気をもらって帰っているような気がしますし、まだ若い大学生達がボラセンを運営し立派に活動している姿を見ると日本の未来も明るいなあと思えてきます。

今回は違う現場を見ることで、3.11の被害の大きさ広さに改めて驚いています。メディアでの取り上げも少なくなり、日々の生活の中でついつい忘れがちなのですが、息の長い支援が必要であり、ボランティアへの参加は大変有意義であると実感しています。

今後も何かお役にたてることがあれば、積極的に参加したいと思っています。いつか皆で汗を流した畑に作付けが行われているところを見に行けるといいですね。

#### **飯田地協** [電力総連中部電力労組飯田総支部・桂川 宗一郎]

今回の旅は人の『思い』に触れる旅だった。

300円で仮設住宅に住むおばあさんが作った復興ふうせんを買う。一つ一つ丁寧に作られている。よく観ると折り目がしっかりしているのがわかる。おばあさんのことを何も知らないが、伝わってくるものがある。

Reerootsの学生たちに目を奪われる。彼らには自発的に動く者がもつ特有の真っ直ぐな視線があった。まだ未成年なのに立派だと思う。彼らの行動が実を結ぶことを祈る。

参加して得るものが多かった。





## **上伊那地協** [電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部・羽田 一城]

今回の復興支援ボランティアは自分にとって特別なイベントでした。今年6月に連合長野の執行委員会と地協代表者会議を宮城県で開催した際に、石巻市と仙台市若林区を視察し、初めて東日本大震災の被災地の現状を目の当たりにし、同じ日本人として何かをしたい・・・と言う気持ちになり、色々な場面で被災地の状況を知っていただく活動を単組内、グループ内で行ってきました。そんな折に、連合飯田地協さんからの「南信地区から参加し易いプランを上伊那地協と連携して実現させたい・・・」のご提案を頂き、事務局として即、決断して実現に向けて検討に入りました。日程調整で苦労はありましたが連合長野と長電観光さんのご協力もあって実現しました。

正直、企画に携わった連合役員として、南信地区全体や自分の単組からどの位の参加希望者がいるのかが不安でしたが、申し込み開始から割と早い段階で定員に達し、単組内での一般募集でも3名(単組全体では5名)の組合員が募集してくれ本当に嬉しかったです。

作業は思っていたよりハードで2日目の午後には身体がガタガタでしたが、一緒に作業をした秋田大学や東京経済大学の学生さん達に若いパワーを分けて頂き、何とか3日間頑張ることが出来ました。個人としては本当に微力ながら自分の身体で復興支援のお手伝いできたこと。また労組役員としては皆さんに理解して頂ける機会を提供できたことが本当に良かったと感じています。

まだまだ、復興は道半ばですが、これからも労組役員として、個人として出来ることに取り組んで行きたいと思っています。

## **上伊那地協** [電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部・北尾 裕]

今回初めて復興支援ボランティアに参加させていただきました。

当初予想していた作業内容とは違って、農地の瓦礫除去など非常に地味で根気のいる作業でした。私たち全員で何時間もかけても、ほんの少しの農地しか除去作業が進まずに、まだ手付かずの農地が非常に多く、全ての農地が終了するまで、あと何年・何十年掛かるのだろうと思うほどでした。少しずつでも続けていけばいつかは必ず以前の状態に戻るはずであり、現に野菜を作っている畑も見受けられました。

地道に作業を継続するという事がいかに大事であるかを思い知りました。

またボランティアセンターに登録している学生さんたちですが、平日は大学で勉強・休日はボランティアと遊びたい年頃だと思いますが、復興の為に働いている姿に強く感銘を受けました。

実際に自分の目で見て、体験できた事が私にとって非常に貴重な体験でありました。

復興支援ボランティアに参加して本当に良かったと思っています。

### 初めての東北ボランティアを終えて

## **上伊那地協** [電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部・松澤 斉]

私が東北に行きたいと思ったのは、被災した福島の友達を応援したいと思ったのが始まりだった。だが伊那から福島はあまりに遠く、また放射能が立ち上りだか。悶々とした日々を送っているときに、今回この企画を知り、地区の行事も子供の行事も放り出して参加してしまった。仕事の後、地元から参加できることが有りがたかった。場所は福島ではないが、とても良い”きっかけ”となった。この企画に大変感謝している。

そして震災から1年8カ月、私は東北の被災地に降り立った。場所は仙台郊外の海近く。テレビで見た光景は既に無く、きれいに片付いた大地には、見渡す限りの田畑が続いていた。しかし家の土台

だけが残されている集落をそこに、あそこに、ここにと目の当たりにした時、私は改めて認識させられた。田畑だけではなかった。ここには、確かに人々の生活があったのだ。この場所に、見上げる大津波がやってきたのだ。

自然と活動に力が入った。被災された方々が少しでも笑顔になればと思った。作業は田畑のがれき拾い。スコップで土を掘り返し、その中にあるガラスやプラや、コンクリの塊や流木などを拾った。過去に腰を痛めている私は、今回参加が決まった時から、毎朝走り、スクワットを続けてきた。その甲斐あって腰はさほど問題なく、作業に集中した。こんなに一生懸命に取り組む自分に驚きをもった。後から筋肉痛が全身を覆った。

全て終了した後、海辺の慰霊碑に手を合わせ、黙とうをして、帰りの途に就いた。片付けられた海岸ではあったが、傷ついた松林が痛々しかった。

復興ボランティアは、まだまだ長く必要だ。今回も何十人もの方が集まったが、少しの田んぼしか手がつけられなかった。その膨大な作業に誰でも投げ出したくなるだろう。でも必死で頑張っている。その光景が東北の太平洋側に、延々と続いているのだ。行って良かった、今素直にそう思う。今回、土・日に、秋田から東京からと学生さんがツアーバスを組んで応援に来ていた。日本の若者に「思いやりの心」がしっかり宿っている限り、日本の、そして東北の未来は必ず明るい。そう信じながら、いつか私も再び東北の地に立って応援をしたいと思う。

連合さんにはこれからも良い”きっかけ”を期待したい。大変お世話になり、有難うございました。

#### **上伊那地協** [電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部・吉沢 昌男]

以前より、被災地へのボランティア活動に参加したいと思っていたところ、この飯田発の復興支援ボランティアツアーの募集があり参加しました。

ボランティア活動自体、初めてのことでしたが、微力ながらお役に立てたかなあという思いと共に継続的な支援の必要性を感じて帰ってきました。

今回の活動は、仙台市若林区での畑の再生（①スコップで土を掘り起こして、ガレキ類の除去と分別 ②再生の最初の作業である草刈り）でしたが、このように手間がかかる作業がまだまだ残っています。また、その支援を必要としている人たちがいます。

震災から1年半以上経過していますが、復興への道のりは、遠いことを実感しました。

ボランティアセンターで、リーダーとして活躍していた大学生、サポートする高校生。近くの学校で、部活に励んでいた中学生。彼らの未来が明るいものであることを願わずにはいられません。

最後になりましたが、今回ご一緒させていただいた皆さん、事務局の成沢さん、長電観光の三木さん、飯綱観光のドライバーさんありがとうございました。

2012年(平成24年)11月10日 土曜日

## 震災忘れないことが風化防ぐ

高校生 小松 成実  
(仙台市泉区 15)

「震災の風化を私はおそれる」(10月23日)を読み、岡山県の高校生の投稿ということに少し驚きました。

私は宮城県の内陸に住んでいます。震災は多くのものを傷つけたし、奪っていきました。しかし、同じ県に住んでいても、沿岸部のことをひとごとのように感じる時が私にはあります。

直接的な被害、支障をきたしてはいないから。

そんな私が、震災当時、沿岸部で活動されていた自衛隊の方のお話を聞く機会があり、活動の内容、震災当時の様子を聞きました。友人がこんな質問をしました。「当時は物資などがとても必要とされていましたが、今、私たちは被災地のために何をすればいいのですか」と。

答えは、「忘れないことです。義援金ももちろん大切ですが、一番は、震災があったことを忘れないことです」。私は驚き、次に納得しました。日本のどこに住んでいたって、それが一番大切なのだと私も思います。

### 上伊那地協 [電機連合ケンウッドグループユニオン長野ケンウッド総支部・山田 理]

東日本大震災発生直後、色々な報道などを目にする中で「自分にも何かできることはないだろうか」と考えることがあり、復興支援ボランティアには興味を持っていました。

しかし目にするものは1週間程度の期間のものが多く、仕事・家庭など周りの状況を考えると実際に実行するのは難しいものでした。又、震災から1年半が経過し自分の中で風化していたのも事実です。今回2泊3日で比較的短期であり、週末を利用した活動であったことから以前から心に秘めていた思いもあり、参加申し込みをさせて頂きました。

実際に参加申し込みをしたものの「自分に何ができるのだろうか」とか「逆に迷惑をかけてしまうのでは無いか」という不安は当日までありましたが、現地に行くバスの中で行った自己紹介の中でお聞きした「我々は微力ではあるが無力ではない」という言葉が気持ちを和らげてくれました。

現地に到着して目にしたものは衝撃的なものでした。高速道路から全体を見た状況では報道などで目にした大型の瓦礫は撤去されており、大分片付いている様に見えましたが畑には未だ小さい瓦礫が残っており、土を少し起こすと色々な瓦礫が出てきました。それは煉瓦・瓦などの建築資材から生活用品まで多種に渡るものでした。又、土を起こしても虫などの通常目にする生物を見ることは出来ず、農業の復興には未だ時間がかかることを認識せざるを得ない状況でした。今回支援を行った仙台市若林区は広大な農業地帯であり地域住民の生活再建には農業復旧が不可欠な状況ですが、この状態では農耕機械を入れることも出来ず、復興には未だ長い道のりがあることを実感しました。

又、作業後に訪問させて頂いた七ヶ浜町や仙台市荒浜地区の状況も震災の爪痕が未だそのまま残っていました。

復興ボランティアから戻り、職場などで話をする機会がありますが話の最後に「機会があれば行くべき」と話をしていきます。震災より1年半が経過し発生時よりも色々なものが風化しているのは事実です。その中で風化させない取組み及び継続した支援が必要であることを再認識すると共に私自身が再び現地に行くことは仕事の事情・家庭の事情などあり中々難しいですが、実際に活動に参加した経験を周りに少しでも話をして、その中で興味を持って現地に行く人が増えれば良いなと思っています。

今回の復興支援ボランティアを企画して頂いた長電観光及び連合長野の方々に感謝します。ありがとうございました。

### 上伊那地協 [電機連合ルビコン労組・上島 枝三子]

穏やかな波の音を聴きながら、自然は残酷だと思いました。沢山の命を奪ってなお私たちは自然に生かされている。家も田畑も失って、それでも故郷を愛してしまう。被災された方々のことを思い、自分の大切なものと重ね合わせてはどんな思いだっただろうと想像すると胸が痛く、苦しい3日間でした。

今回初めて支援活動に参加させて頂き、不安も多い中皆さんと活動を共に出来たことに感謝しています。若林区は広大な農地の広がる場所で、緑や多くの作物の実る美しい場所だったことが容易に想像できました。その多くが津波の被害を受け除塩や瓦礫撤去を待っている状態で、被害の範囲、規模の大きさに愕然としました。畑の瓦礫には瓦や木・石・ガラス破片の他に裂けた洋服などもあり、現地の方の「瓦礫じゃないんです」という言葉をかみ締めながら、作業をしながら泣きそうになってしまいました。被災地の復興にはまだまだ長い時間と人手が必要ということを痛感しました。

貴重な体験をさせて頂き忘れられないことばかりですが、七ヶ浜ボランティアセンターの方が「復興に向けて前向きに歩み始めている人もいる中で、震災の影響が時間と共に重く押し掛かっている人もいます。これからが本当の支援が必要な時」というようなことをおっしゃっていたのが強く印象に残っています。辛い記憶を消したり背負ったものをおろしてあげることは出来なくても、これからの時間が悲しみよりも喜びの多い日々になるよう、微力ながら自分に出来ることを考え、行動していきたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を頂き、出発前から安全に円滑に活動できるようご配慮くださった、長電観光・三木さん、連合長野・成沢さん、本当にありがとうございました。

### 上伊那地協 [電機連合長野日本電気労組・宮澤 敏彦]

11月9日～11日、仙台市若林区への東日本震災復興ボランティアに参加させていただきました。3・11から既に、1年半余りが過ぎ、自分の中での震災印象が薄くなる中での今回の募集に、迷いながらの申込みでした。

過去に別のボランティアに応募し抽選漏れ、プライベートでの参加のツアーを探したりしながら常にもう1人の自分が、行けない、行かない言い訳を見つけ躊躇ばかりしてしていました。そんな意味で、今回は伊那からバスに乗車して現地に行けるツアー、職場の理解もあって参加できました。

当初、南三陸の行程が仙台市若林区に変更となり、仙台では震災の傷跡も跡形も見ることができないのではと、あきらめていました。

初日の作業は、仙台の中心部から10kmほどの民家の畑。その畑の掘り起こしと中の瓦礫拾いでした。この場所、海からも離れ、津波が来たのか???

何しろ、隣の民家では、普通の家があつて居住しており、畑には野菜が育っていました。この隣の家ですが、津波が来た時に家に戻って、1階の玄関、窓、サッシを全て開放したそうです。そうすることによって、水が抜けて家が流されなかったとのことでした。

一方の作業現場の家は、母屋がそっくり流されたとのことでした。(現在は、仮設でのお住まいとのこと。)

この作業した農地ですが、掘り起こすと、石、木片以外にも、プラスチック、瓦、ガラス片やら鉄屑、生活用品が出てきてビックリ。トラクターではできない、瓦礫分別作業だと良くわかりました。

数十人で1日かけても、大して作業が進まず、本当に気の遠くなる作業でした。

海水の除塩ばかりが、ニュースとなっていますが、農地として復活するには、多くの作業があるこ



とが良くわかりました。



また、せっかく多くのボランティアの参加者が居ても、農機具が不足していて、手作業になって不効率なことも発生し、ボランティアだけでなく、道具やトイレなどを準備したり設置したりする資金の不足も実感しました。

2日目、3日目も同様の作業でしたが全て違う場所での作業でした。

仙台からどんどん海側の場所となり、海に近づくにつれて、震災の跡が明確にわかるようになってきました。

広大な元農地には、重機だけが点在し、何もない状況です。

ところどころにある建物の多くが、一階部分が全壊していて居住不可能なオブジェになっています。壊し撤去の判断ができる人が居ないのかもしれませんが・・・。

建物が無い場所にも、宅地には家の基礎だけがむき出しに残っているのです。

海の近くは、レッドゾーンと呼ばれ、自分の土地でありながら家を建てられない区域となり、仮設住宅からの今後も見えないとの事。本当に、復興などまだまだこれからなのだと、実感しました。

被災地から離れ住み、知り合いが東北に居ない自分には、ニュースも興味が薄くなっています。

ニュースや写真、人づてに聞く話では感じられない事が、今回のボランティア体験により、実感できました。現地の状況を肉眼で見て、被災された方の話を直接聞くことが、大きなインパクトとなりました。こうして、自分の体験談を読んでも、写真を見ても、なかなか現地の様子を伝えることができません。ただ、他の方の理解が少しでも深まれば、そして自分自身が忘れずにいることが一番ですね。

最終日には、作業後に若林区の荒浜地区、荒浜小学校と海岸、そして慰霊碑に立ち寄ることができました。荒浜地区は、震災では10mの巨大津波で壊滅的な被害を受けた地区です。この荒浜地区の海側は、住んでいる人はほぼ皆無で、家の土台だけは残っていて住宅地であったことがよくわかります。荒浜小学校の周りは校舎と体育館以外、建物らしき物はほとんどありません。以前は海水浴場だった静かな海岸を見て、10mの津波がイメージできませんでした。



とにかく、今回の仙台ではいろんな事を感じましたが、言葉で表現するのは難しく、文字にするのはもっと難しいです。仙台の中心街から、ほんの20km程度の海岸で、同じ仙台市でとてつもない津波があったこと。さらにその被害から、ほとんど復興が進んでいないことを実感しました。

さて自分自身、これから何ができるのか？まず、周りの人に発信することです。家族、友人、職場のメンバーに、少しずつ自分の感じたことを、自分の言葉で伝えたいです。震災そして復興に対しての自分の意識の変化、復興が進んでいないこと、終わっていないことなど・・・。周りの人に少しでも

気付きを与えられたらと思います。そして、まだまだ具現化していませんが、ボランティア以外にも自分ができること、しなければいけないことも探しながら生活し、決して記憶と体験を風化させないようにします。

話を交えて、僕のお世話になったボランティア団体ですが、メインは学生ボランティア（30名程）が運営しています。そして、活動も学生ボランティアがとても多かったです。

本当に、20歳前後の学生が元気に頑張っていました。学生は時間があると言ってしまうまでですが、日本の将来は明るい！と感激しました。

さらに、被災された方々の力強い、復興への決意を伺って、自分が元気と勇気をもって帰ってきたというのが本音です。

### 「微力だけど無力じゃない」この言葉に支えられた3日間でした

**上伊那地協** [電機連合長野日本電気労組・酒井 久美子]

以前南三陸のボランティアに参加したことがあり、自分としては2度目の参加でした。今回は仙台市若林区という場所で、宿泊していたホテルからそう遠くないところでした。仙台市の中心部は震災を感じることはありませんでしたが、そこから少し移動しただけで全く別の光景が広がっており、とても違和感がありました。

今回行った作業は、畑の土おこしとそこから出てきた瓦や生活用品、石などの撤去作業、草取り等でした。作業の説明は大学生が行ってくれました。学生中心でボランティア団体を運営しているとのことで、その姿を見て、もっと自分自身しっかりしなきゃいけないなと思わされました。

作業は地味ですごくはかどるというものではなく、長期で継続していかなければならないものでした。前回のボランティアのときは、こういった作業でいつになったら復興するんだろう、本当に役に立っているんだろうかという思いでいっぱいでしたが、今回1日目のお宅のお父さんが、「またお願いします。助けて下さい。助けて下さい。」と何度も頭を下げる姿を目の当たりにし、このボランティアの必要性を感じました。すぐに成果は見えないけれど、地道にこのような活動を続けていかなければいけないと思いました。

最終日に慰霊碑に行き、黙とうをしました。あの日何が起こったのか、その地へ行きその場に立ってみても、想像をはるかに超え過ぎていてわかりません。なぜこんなことが起こってしまったのか……。家が何もなくなってしまったどこまでも平らな景色を見ると、やっぱり現実なんだな。と思うのと同時に、忘れてはいけないと強く思いました。

今回このようなボランティアツアーを企画していただき本当に感謝しています。今後もこの想いを忘れずに、見てきたことや肌で感じたことを周りの方へ伝え、自分のできる活動を続けていきたいと思っています。

**諏訪地協** [自治労長野県職員労組諏訪支部・小山 桂子]

長野県には、津波だけは来ない。中越地震や諏訪の水害でも支援に行ったが、被害は今にして思えば局地的だった。

津波の後には街や団地がまるごとなくなっている。戦争は防げるが、あれほどの津波は相当な堤防を作ったとしても防げない。人間の力ではどうすることもできない。

土台だけが整然と並ぶ、人の気配が消えたレッドゾーン(居住禁止区域)。一階が骸骨のようになった家がぼつんと残る。その後ろには焼却施設とがれきの山。

勤め先の某県立高校事務室では、「国のお金がみんな震災に行っちゃって予算が回ってこない」と皆でぼやいていた。現場を見たら、もう仕方がないと思った。

震災半年前の八月。娘がキャンプに行った間、ダンナと三陸鉄道の旅としゃれこんだ。ゆっくりした時間の流れる町。海水浴でにぎわう松の浜。美しい空と海の広がる地に優しい癒しをもらった。

三月、職場のテレビで見た津波の映像。テレビの前で何もできない自分がはがゆかった。それからずっと、なにか恩返ししなきゃと思いながらも、なかなか一人ではボランティアに行く決心ができないでここまで来た。今回は、申し訳ないが、自治体の職員としてというよりは個人的動機で参加した。でも現場は想像以上だった。職場に戻って伝えたいこと、今後の仕事に組み込んでいきたいことがたくさんあった。

ボランティア団体「リルーツ」は活気にあふれていた。土日には、自分たちを含め、バスが何台も来ていた。お隣り山梨県からの夜行ツアーバス、秋田大学と東京経済大学から各々、学生ボランティアサークルの仕立てたバス、山形県からの中学校マイクロバス。慣れた様子で受付表に記入する一般参加の方も多かった。

「リルーツ」は現在のスタッフの多くが東北大、東北学院大、宮城大の学生とのこと。連合長野一行のリーダーは3日間とも大学1年生。「彼ら、震災当日はまだ高校2年だったんだよな」と長電の三木さん。若い力が頼もしく、まだ日本は大丈夫だと思えた。

シャベルを使う土おこしの作業は思ったよりハードで、人力のみではなかなか進まなかった。力のある男性陣とせっかくの大人数、作業の方法には工夫の余地があるのではと思う部分もあった。

3日目リーダーのマシュマロ君(ニックネーム)が、まだやることはたくさんあると思うのに、他地区ではだんだんとボランティアセンターが閉鎖されていると言っていた。家に戻ってからHPを検索すると、確かにけっこう閉鎖したところがある。

忙しい地元自治体、被災者でもある地元民がボランティアセンターを続けていくのはかなり大変なのだろう。その点、リルーツは自由に動ける人が多いので、うまく回っているのではないかと思う。民間団体なので公平性うんぬんを気にする必要もなく、いろいろな要望に応える機動性がある。公的機関でできないこと、やらないこと、思いつかないことをいろいろとやってのけていると感じた。

農林水産省の表彰を受けたとのこと。今後も長くがんばって行ってほしい。

まとめませんが、今回はボランティアに参加できる機会を与えていただき、本当にありがとうございました。三木さん、成沢さん、班長さんの統率が的確で、とまどったり孤立することもなく、昼も夜もしっかりやることができました。参加者の皆さんもみんな気さくでいい人たちばかりでした。

今回の経験を、家族はもとより職場の先生やできれば生徒にも伝え、「震災を忘れない」人を一人でも多くしたいと思っています。3日間、お世話になりました。

